

辻邦生のパリ滞在 (24)

Le séjour de Kunio Tsuji à Paris

佐々木 涇*

SASAKI Thoru

22 charmeの取り込み (承前)

22-4 小説構成のヒント

小説の世界には、物語の展開、登場人物たちのさまざまな行動と言動、そして喜怒哀楽を生じせしめる人間関係、さらには事件、事故、天変地異が織り込まれることで読者にもたらす感慨、それを醸し出す一定の雰囲気がある。むろん、これらのさまざまなことからは、小説家によって、その雰囲気を導き出すために秩序づけられている。すなわちその作品世界の支配的な存在としてのものである。これを辻邦生はドイツ語の *Stimmung* (情緒) をキーワードとして用いている。そしてその中心にあるのが *charme* である。

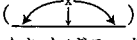
シュヴァルツコップが雨を見ている情景、この雨の描写は、それだけで静止していない。それを読むと、何か心がある種のふるえを帯びてくる。*Stimmung* にとらわれる。それは、それを読むことで、新しい世界の内側へ入っていることを確実に感じるからだ。こちら側という実感があるからだ。そこから *Charme* が生れる。同時にそれは欠如し、何かを求めている (物語の機能的効果。物語的全体の部分)。統一するとは、物の全般的拡散の中から、統一の要素をぬきだすことだ。何から何まで書くのではなく、まず統一原理としての *Stimmung* があり、その *Stimmung* の等高性によって、物を切りあげ、すくいだすのである。それは自己の世界に凝集しようとする。ただこの全体をつかむこと、その *Stimmung* を一挙

に生きること——それが作品を成立せしめる秘密のすべてだ。(11月3日)

上の引用文の「物の全般的拡散」とは小説世界ならぬ現実世界のものや人間、事件のありようであって、統一されているのではなく拡散の状態であることを示している。それを小説世界に取り込むために *Stimmung* が重要とすることだ。そして『ブッデンプロークス』の分析で辻邦生は新たな事実を発見する。

Penché sur un cahier à couverture gaufrée et à tranche dorée, il s'affairait à écrire, de son écriture mince, pré-cipitée et minuscule, ne s'interrompant que pour tremper sa plume d'oie dans le lourd encrier de métal……ここには、いわゆる客観的対象に即した描写はない。ここでは、ある *Stimmung* が主導的な役割を演じている。「ペンをインク壺に浸すために書くのを中断するほかは……」という主情的構成に注意しなければならない。ペンをインク壺にひたし、書き、またひたす……これが「物」のもつ調子である。しかし彼は集中している。この行為の集中を光らすものとして、あたかも上から金ぱくを塗るように、カッコにでも入れたように、この句がくる。そこには、作者の胸の「ふくらみ」が流れだしている。平面的な「物」の調子ではなく、秩序だてられ、効果的に仕上げられた構成がある。ペンをひたすという行為を際立てることによって、生れるある種の情感。魅惑。新しい秩序、いわば言語による秩序がここにある。新しいパースペクティヴが生れている。作者

*産業社会学部教授

の主情性によってそれは流れだしてゆく。作者がそうあらしめるのだ。その全体をつかみ、消化されたあとの、作者の Stimmung によって、大きいもの、小さいものという風に出てゆく。(— x — x — x —) というのが現実の順序であるとすれば、 という風に、新しい秩序を言葉でつくりあげる。構成的に、効果的に、あたかも白い絵の具を、あとから塗るように。(11月4日)

フランス語の部分は翻訳しないでおく。その理由は日本語にしてしまうとその様子が解りにくくなってしまふからだ。冒頭の「Penché」から「et minuscule,」まではノートの中にのめり込むようにして細かく細い字を急いでせわしげに書く姿を想像して欲しい。そして辻邦生が注目する部分はその次の文章である。「ne s'interrompant que pour tremper sa plume d'oie dans le lourd encrier de métal」の部分に辻邦生は「ペンをインク壺に浸すために書くのを中断するほかは……」という訳を、不完全であるが、つけている。日本語訳で置き換えてしまうと、言葉を読み取ってそのままイメージを固定して理解する方法が破壊されてしまう。ノートにのめり込むような姿、書くことに夢中になり、その文字が小さくそして急いで書いているためいくらか崩れている。その様子が続き、最後にインク壺にペンを浸すことで書くことが中断するイメージが付け加えられる。このイメージを連続して読み取らなければならないのだ。ここに辻邦生は見いだしたのだ。この『ブッデンブロックス』における文章の構成でその秘密を理解したのだ。そしておそらく辻邦生は声を上げるか、膝をたたいたであろう。初めての発見もある。

こししばらく『ブッデンブロックス』の詳細な分析。そのヴィルチュオジデにはただおどろくばかりだ。この長篇の本質が、短篇を細かくつみあげていったものであることを、はじめて発見した。リュベックについての講演の中でマン自身が、この形式をゴンクールの『ルネ・モーブラン』によって暗示され、再読したといっている。その一章一章が、短篇として完璧の技術の冴えを示しているばかりでなく、僕がいままでかかって模索してきた芸術的空間の意味を、この若い作家は完全に身に体して制作している。(11月8日)

ヴィルチュオジデはフランス語で「優れた技量、妙技」という意味である。この11月8日の日記を見ることで辻邦生が試みて作品となった100の短編からなる『ある生涯の七つの場所』の作成ヒントをここに認めることができる。

22-5 私的生活から

これまで辻邦生のパリ滞在の手記には佐保子夫人はAという匿名名詞で登場した。その佐保子夫人の登場の仕方は、ことばや行動が日常生活、あるいは共に旅行したときの一部として書かれたのみである。ところが、この11月2日の思索展開のなかで佐保子夫人が登場している。小説との関係になぞらえているのだ。

小説の技法の細かい検討を続けながら、僕にとって、それ以上に必要なものは、小説と僕の関係だということ深く感じる。これは生活に根ざす基本的問題だ。そしてそれは「愛」なくしては僕には考えられず、愛については、Aなくしては考えられない。愛とはむしろ肉慾的な魅惑にもとづく。しかし相手を支配したり、相手を手に入れるまでのスリルの上にあるのではない。むしろ愛する存在と共にあること——それが出発点となる。そこでは、愛する存在がただ花開くことを願い、そのためにすべてを捧げようとするのが、自分の魅惑であり幸福であるように、基本の関係がつくられている。そして何よりも、自分の発展は、この魅惑なしでは達せられない。事実、Aと読書と思索がなかったら、僕の発展はありえなかったろう。(同)

辻夫妻と私がパリの南西にあるコンブレーを訪れ、プルーストの『スワン家の方へ』の冒頭に登場する大叔母さんの家を訪ねたことがある。その日の昼食時にレストランで辻夫妻の出会いのことを、ふとたずねると、佐保子夫人にたしなめられた。決して興味本位ではなく、むしろ羨ましさを感じさせるほどの二人の様子であったからだ。私にはもしかして劇的な出会いがあったのではないかと思えたのだ。この辻夫妻のありようは情熱的なものではなく、むしろ淡々とした、上の引用文にあるような「共に生きている」という姿だったのだ。

それ以後、私はその時の姿だけを固定した。しかし二人の出会いを知ることができた。辻邦生が

亡くなる直前まで書いていた『のちの思いに』にそのことが載っている。その部分を引用しておく。短編の翻訳の名手として知られていた杉捷夫教授の講義中のできごとであった。

教室に入ってくると、先生も学生もあまりしんとしているの、まだ授業が始まっているとは思えない。あるとき一人の女子学生ががたんとドアをあけて入ってきた。彼女はもう授業が始まったものと思って息せききって飛んできたらしい。本人は小声で友達に囁いたらしいが、なにしろ教室はしんと静まりかえっているの、彼女の声は遠慮なく大きく聞こえた。「ああよかった、授業に間に合っ！」何のこだわりもない明るい声で、いかにも間に合ったという安堵の声に聞こえた。まわりで何人かがくすくすと笑った。授業はもう始まっていたからだ。すぐそれに気づいた彼女は、長いペロをペロリと出して肩をすくめた。私はそれを見て思わず声を出して笑った。ちょうどその朝は、夏の気配が感じられるような明るい天気で、誰もが女子学生の様子を見てくすりと笑った。

本郷三丁目の方からチンドン屋がクラリネットを吹きながらやってきた。背の高い男で、そばにタンバリンを持った女の子が踊っていた。遅れて入ってきた女子学生はこの踊り子に似ていた。夏の匂いがしていた。私は遅れて入ってきた女子学生がひどく可愛く思えたので、声をかけようとしたが、そのときはもう教室を出ていた。クラリネットが聞こえたのでまだ通りにいるかと思って探してみたが、もう踊り子の姿も見えなかった。

（『のちの思いに6 女子学生と夏の匂い』日本経済新聞、1998. 11. 8、p.16）

この場面が佐保子夫人を初めて見たときである。その後、女子学生の姿を追い求めるが杉教授の講義でも見かけることができなかった。しかし大教室での講義で見かけたとき、その女子学生が美術史学科の学生で皆に「リスちゃん」と呼ばれていることを知る。

残暑はまだ九段坂を斜めに照らしていた。そのとき坂の向う側を若い女性が何かものを捜すような様子で歩いてきた。落とし物を確かめるように四、五歩あるくと、また道をもどる。暑い西日は容赦なく行きつ戻りつする通行人を照らしている。私は通りの反対側にいたにもかかわらず、それが大学で同じクラスに出ているリスちゃんであるのがすぐ分かつた。……略……

た。……略……

彼女のほうは相変わらず行ったりきたりして何か落とし物を捜している。大きなものを失くしたのなら、こんなに何度も行ったりきたりしないだろう。私は思いきって女子学生に声をかけた。

「何か失くしたんですか」

「ええ、つまらないものを落としましたものだから」

「僕も同じ大学の学生です。一緒に捜してさしあげましょう」

相手がためらうのを見て私は言った。

「文学部の入り口でおみかけしました」

「何を落とされたんですか」

「それが……」相手は言いよどんだ。

「狼の足あとなんです」

「狼の足あと？」

私はびっくりして大声をあげた。

「ええ、今アルバイトをしている出版社のお使いで、印刷屋さんから動物なんかのカットの版下をもらってきたんです。出版社に戻ったら一個足りなくて、狼の足あとだけ失くなっているんです」

近くの印刷屋から少し離れた出版社までの間を、通りのあちら側とこちら側に別れて、私たちは舗道の上を丁寧に探索していった。簡単に捜せると思ったが、版下の狼の足あととは意外に見つからなかった。……略……

女子学生はもう悲しそうに涙を溜めている。

「泣いちゃいけませんよ。狼の足あとがどんなに貴重でも、あなたの涙ほどではありませんからね」

私の言葉に彼女はほほ笑んだ。

「大丈夫です。泣きはしませんから」

「気が強いんですね」

「ええ、この程度のことでは泣きません」

「じゃ、もう諦めて帰らしましょう」

私はまだリスちゃんについて何も知っていなかった。リスちゃんという名前だけ知っていると言うと、「あら、そんな」、彼女はひどいという表情をした。

（『のちの思いに15 狼の足あとを求めて』日本経済新聞、1999. 1. 10、p.14）

以上が出会いである。劇的といえば劇的である。次に会った部分も引用する。私が知る雰囲気 그곳に現れているので。

私がようやくの思いでリスちゃんに出くわしたのは、例の「足あと捜し」以来、一月はたったころだった。

彼女は上から降りてくるところだった。

「やっとお目にかかれましたね」

私が言うと、一瞬ぼんやりして私が誰か分からないようだった。

「九段坂で、いつか狼の足あと……」

私は地面に転がった狼の足あとを思い出せるように、小さな版下を拾うような身ぶりをした。

「あ、あのときは長いこと捜して下さってありがとうございます」

「結局見つからなかったんでしょ？」

「あんな小さな足あと、見つける方が無理よね」

……略……

「やめたんですか」

「ええ、私には向いていないことがよく分かったんです」

「バイトが？」

「ええ、あまり働くのに向いていないのがよく分かったんです。私、あまり努力しないたちなんです」

「でも図書館で勉強してるじゃありませんか」

「あら、そんなところ見ていらしたんですか」

「通りがかりに見ただけです」

私はたまたま例のランソンの文学史を持っていた。文字通り電話帳のような分厚い本で、リスちゃんがそれを見て、私が大いに勉強家であることを知ってもらいたい本であった。そのとき文学史をかかえていたのは私の幸運であった。どんなにリスちゃんが私のことを尊敬してくれることだろう。私は心の底でランソン文学史が得意だった。

「そんなに大きなご本をいつも読むの？」

「いつもじゃありません。時々読みます」

「そんな厚い本を読むと疲れるでしょう」

「面白いからそんなに疲れません」

「私なら見ただけで疲れてしまうわ」

「だけど図書館には偉そうな本が沢山あるじゃありませんか。ああいうのを読んでみんな偉くなるんです」

「じゃあなたも、この電話帳みたいな本を読んで偉くなるんですか」

「ほくは別に偉くなると思っていませんが」

「でも、いかにも、こんな厚い本を持って偉そうに見えるわ」

「いや、別に偉く見せるために本を持っているわけじゃありませんよ」

「でも、とても偉そうに見えたわ。」

これからは薄っぺらな軽い本になさるといわ

「あなたは大学にきててもあまり偉そうな本は読まないんですか」

相手はおかしそうに首を振った。

「私は厚い本をふうふう言って読むのは好きじゃないの」

「だって、大学ってところは厚い本をうんうん言っ

て読むところっでしょ？」

「私は反対。薄っぺらい本を読んで散歩するところ」

リスちゃんは屈託なげに笑った。

(「のちの思いに16 電話帳のような本」日本経済新聞、1999. 1. 17、p.16)

この『のちの思いに』は確かに辻邦生自らの生涯の一部を書いている。しかし目的があった。東京大学のフランス文学科に在学中の作品に雰囲気を残して置きたいという思いを語っていたのは、この作品を日本経済新聞に連載することを私が聞いたときである。もちろんこれは回想録ではなく、辻邦生の生涯の一部をモデルにした物語という認識で読むべきである。その目的は達せられたと言える。ある年配の読者が、私に「リスちゃん」との出会いの部分を含めて当時の雰囲気に関して印象に残っていることを語ったことがある。

先に引用した杉捷夫教授の講義に続く場面で、登場するタンバリンを持った踊り子が「女子学生」の姿と重なっている。そして大教室で見かけて「リスちゃん」と呼ばれていることを知ったときも、すでに本郷通りで同じ踊り子を見かけた後だった。この『のちの思いに』に登場する踊り子のイメージが、辻邦生のある作品に登場している。その作品は『背教者ユリアヌス』で、ユケルムの離宮を無断で離れたユリアヌスが旅をする街道で知り合った軽業師一行の親方の娘、ディアの姿がそれである。そのディアを辻邦生は次のように書いている。

ディアは色の浅黒い、卵形の可愛い顔をした娘で、黒いきらきらした眼は、甘美な微笑を浮かべたナウシカアの眼のようだった。

(『背教者ユリアヌス上 第二章 幽閉』中公文庫、1974、p.194)

このディアとユリアヌスの逢瀬は、ユリアヌスがガルス副帝の弟であることを知っても続くが、むろんなわぬ恋となる。

パリの手記に戻ろう。佐保子夫人との関係を記したあと次のように展開している。

僕と小説との関係は、ちょうどAとの関係に似て

いる。小説への愛は、小説が花開くことをしか望まず、ただそれのみが魅惑となる。小説に自らを放棄すること、そのネガシオンを通して小説ができることに対する魅惑。そしてこの魅惑は、自らの発展と切りはなせない以上、僕が、読書し思索し行動し、自らを発展させてゆこうとすれば、小説をつくりあげるネガシオンの魅惑が、その各々を、肉慾の魅惑でひたしている。僕がみずから悩み、考えぬき、もつめあえぐとすれば、そのような献身は、小説へ自らを放棄する魅惑のなかで完成する。この放棄の魅惑があつて、はじめて、悩み、考えぬく精神の活動が完了する。小説は僕にとって、この現実の卑小な、すき間だらけな、無意味、無秩序にくらべて、唯一の現実的な、意味ある存在である。

(11月8日)

ネガシオンとはフランス語で「否認、否定」の意味である。ありていに言えば、佐保子夫人がいなければ辻邦生は生きることができないのであり、小説なくしては生きられないのである。しかも小説の世界の方が統一されており、意味があつて現実的だとする。偏愛とでも言うべき認識である。これに続く部分では小説書くためには未だ不完全であるという認識があるために次のように展開する。

僕は小説のなかに自らを放棄し、小説の輪郭にそつて、読書し思索するものでなければ、真の成長はありえない。それはいわば僕の第一の現実であり、そのなかにあつてはじめて読書も思索も意味をもつのだ。僕は永遠に欠けた存在であり、また「永遠に女性的なもの」だけがかかる欠如をみたく唯一の存在である。音楽への感溺は、かかる存在への放棄にほかならない。同じように、小説の制作、そのような「大きな現実」の発顕は、いわば、欠けた現実が、それによって保証され、まもられ、光となり、円環的に完結し、そのような完全な完結性のなかにおいてのみ、僕の読書も思索も、それへの充溢として、支えをもつ。この円環的な完結性は、僕にとつ

て、憧れであり、悩みであり、歓喜である。それは鳴りひびくメロディであり、愛である。(同)

辻邦生が自らを不完全としたうえで「真の成長」のためには不断の読書と詩作が必要であり、それに没入する。すなわち統一性のある小説の世界に入って「大いなる私」の存在のありようを会得することだ。しかしそれだけでは未だ完全とはならない。アダムが失った肋骨からイヴがつけられ、その欠けた部分を求めるかのように「永遠に女性的なもの」を求める。それを得て満たされるような存在となるわけだ。

完結性があらわれ、僕が欠けている存在であつて、はじめて愛が、憧憬がふきあがる。小説が、その本来の輪郭にそつて現われるということ、それは、僕が読書し思索しつ成長してゆく形である。ただ、そのような愛の形象としてのみ、真の発展がある。その憧憬とその形成への捨身が、単なる読書や思索では達しえない有機的な集中してふくらむ空間をつくる。僕が小説を持つのではなく、小説の方が僕を支えているのだ。時間の中に自らを捧げるように、ただこのようにしてのみ、偶然性の卑小な現実をこえることができ、自らの真の生を高めうるだろう。小説をつくること——それは完結性の中に抱かれることであり、「永遠に女性的なもの」に憧れ抱かれることである。(同)

ここでの「愛」について確かめておこう。欠けているものを、あるいは部分を求める。それは完結を目指すためであつて、すなわち成長を補うものである。真の発展を促すものであるからこそ求めるべきものである。これをひたすら望み、求めることが「愛」なのだ。そして男であるが故に欠けた部分を、すなわち女性、もしくは女性的な部分を求めているのだ。(以下次号)